

びわこの 考湖学

24

昔から怖いものの代表格として「地震・カミナリ・火事・オヤツ」が挙げられます。この中で、オヤツとカミナリは考古学からアプローチするのは難しいのですが、地震と火事はその痕跡が遺跡の調査を通じて確認されることがあることから、考古学の研究対象とされています。

時天正13(1585)年11月29日夜、岐阜県北西部を震源とするマグニチュード7・9(推定)の大地震が、近畿から東海、北陸にかけての広い範囲を襲いました。天正大地震です。先日、中国で大変大きな被害をもたらした四川大地震が、マグニ

チュード8・1であったことからも、その規模の大きさがうかがえると思います。近江国も例外ではなく大変大きな被害を受けましたが、中でもよく知られている被害が長浜城の全壊です。当時長浜城主であった山内一豊の記録である「一豊公記」には、

一豊と千代(見性院)の一人娘である与祢姫が、梁の下敷きになって亡くなったことが記されています。また、宣教師フロイスが残した書簡によれば、1000戸あった長浜の町家のうち半分が地面に沈んだり津波にのみ込まれたりし、残り半分が焼けたとい

います。

天正大地震

時は平成の世。旧長浜町の有力者である下村藤右衛門邸跡の発掘調査が行われました。調査の結果、焼失倒壊した土蔵の下から、おびただしい数の陶磁器類や銅銭、穀物類、布などが続々と姿を現しました。

この陶磁器の年代が16世紀後半のものであったことから、この土蔵跡は天正大地震で被害を受けたものであることがわかり、先に述べた地震の被害の一端を知ることができる資料として、非常に注目を集めました。

実はこのような地震の被害を受けた痕跡は琵琶湖の底から、滋賀県立大学の林博通教授率いる調査チームによる調



す。この杭は年代測定の結果1460～1660年に伐採された木であることがわかりましたが、この時期におきた大地震は先に紹介した天正大地震しかないことから、地滑りを起こして湖中に没してしまっただけがわかります。被害のすさまじさを感じずにはられません。

今の世の中でこのような大地震が引き起こす被害は想像できませんが、大地震に備える対策に考古学の調査成果が寄与できるのではないのでしょうか。考古学とは昔のことを考えることで、未来のことを見通す学問なのです。

(滋賀県文化財保護協会)

岩橋浩治

長浜城が全壊 湖に沈んだ街も